広島県連合小学校長会
広島小報

発行所
広島県連合小学校長会
事務局
東区光町１－11－５
地産ビル1003号
電話（082）263－6381
発行者　空本秀寿

主体的に学習に取り組む態度を育てる
単元内自由進度学習を通して

本校では、学習に向けて粘り強く取り組もうとする態度と、その中で自らの学習を調整しようとする態度を養うために単元内自由進度学習を年に数回取り入れている。10月には１・２・３・４年生で国語科・算数科の２教科において、同時に単元内自由進度学習を試みた。児童自らが求めたときに必要な資料が準備されている学習環境の中で、自ら学習計画を立て、自らの学習状況を把握し、学習の進め方を試行錯誤しながら、学習に取り組む児童の姿を見ることができた。また、４学年が同時に国語科・言語、算数科・図形領域を学習することで、児童は今後の見通しを持ったり、上の学年の児童が下の学年の児童に教えたりすることができた。教員はこの学習に向けて準備をする中で、単元を作る力を高めることができ、人材育成も進んでいる。

（神石高原町立豊松小学校・徳重知子）

もくじ

主体的に学習に取り組む態度を育てる……1
事務局日誌……1
研究大会広島市大会を終えて……2
学校経営……3～4
朝会講話……5
県教委だより……6
随想……6
あとがき……6

事務局日誌

7月3日『会報一九二号』発行
7月4日　理事会（東区）
7月12日　全連小会長連絡協議会（東京）
7月25日　幹事会（東区）
7月28日　第1回中国地区理事会・研修会（鳥取市）
8月21日　第59回県連小教育研究大会広島市大会（広島市）
8月24日　総務会（東区）
8月25日　教育調査全体会（東区）
9月4日　県公連不祥事防止対策特別委員会（立町）
9月5日　理事会（東区）
9月15日　速報No３発行
9月25日　全連小教育課題委員会（東京）
9月27日　小学校教育の充実に関する施策と予算について提出並びに意見交換（県教委）
10月3日　県公連理事会・評議員会（立町）
10月17日　幹事会・県市連絡協議会（東区）
10月18日　全連小理事会（東京）
10月19日　全連小75周年記念式典（東京）
10月19日・20日　第74回全連小研究協議会東京大会（東京）
10月24日　人事給与全体会（東区）
10月25日　教育研究小委員会（東区）
10月25日　広報委員会（東区）
10月31日　教育調査小委員会（東区）
11月6日　県公連不祥事防止対策特別委員会（立町）
11月10日　全連小三地区対策・調研担当者連絡協議会（福岡）
11月22日　全連小教育課程委員会（東京）
11月30日　第２回中国地区理事会・研修会（米子市）
12月1日　第70回中国地区教育研究大会鳥取大会（米子市）
12月1日『会報一九三号』発行
※会場の略号
（東区）東区民文化センター
（立町）広島経済大学立町キャンパス

教育の未来は今ここで決まる

第五十九回広島県連合小学校長会研究大会広島市大会を終えて

広島市小学校長会長　熊谷謙次朗

新型コロナ感染症の感染拡大は、私たちの生活を一変させました。しかし学校は、コロナ渦の三年間を子供の健やかな成長という目的を失うことなく地域・保護者の方々との連携協働により教育活動を推進してきました。同時に令和の日本型教育の構築、GIGAスクール構想、教育的ニーズの多様化等の課題に対して「何をすべきか」「何ができるのか」を問い続け、それゆえ多くの知見も生み出されました。そして現在、学校は本来の営みを取り戻しつつあります。

こうした中、県・市分離後、全会員が参集して開催する大会として初めてとなる「広島県連合小学校長会研究大会広島市大会」を多くの会員の皆様方のご参会を得て開催できましたことは大変意義深く、県内各地の教育活動がより一層充実・発展するものとなりました。

ご臨席を賜りました広島市教育委員会教育長松井勝憲様からは、「未来を担う子供の育成こそが、これからの広島の発展の礎であり、本大会参加者の連携によって、本市、本県の教育のさらなる充実・発展に寄与されることを期待する」とのご祝辞をいただきました。

十分科会それぞれの実践提案は、組織的な学校経営の具体や、主体的な子供の姿が感じられた貴重な提案でした。その後の協議会では、会員の皆様方のより充実した学校経営のあり方を模索していこうとする熱意に触れることができ、本県における小学校教育の内実が着実に深まりを見せているとの確信をもちました。

指導・助言をいただいた広島市教育委員会生徒指導課長星野和敏様、指導第一課長高田尚志様、生徒指導課・いじめ対策推進担当課長菅川雄二様、特別支援教育課長山領勲様、教育センター次長西村智由紀様からは「学校教育は教師の力に大きく依存しているが、教師の力だけでは学校現場が抱える多くの課題を解決することはできない。校長をはじめとする管理職のリーダーシップの下で質の高い職員集団を形成し、組織の力で一人一人の児童と向き合っていくことが大切である」などのご助言をいただきました。

そして、大会の最後には、県立広島大学特任教授魚谷滋己様から「学校に携わる皆様にお伝えしたいこと」題して講演をいただきました。これからの世界を生き抜く若者が学ぶべきこととして、ITリテラシーや科学的思考を養うこと、日本の歴史やよさを誇りに世界と付き合い先を見る目を持つこと、ビジョンや夢を持ち自分の好きな分野で社会に貢献していくこと、とご示唆いただきました。私たち校長の学校経営に新たなビジョンをいただくことができた貴重なお話でした。

私たちは今、誰も経験したことのない挑戦の時代を迎えています。校長は学校経営の最高責任者です。学校本来の役割を再認識し、「教育の未来は今ここで決まる」という気概のもと、教育における不易と流行を見極め、各校それぞれの学校づくりに努めてまいりましょう。

そして、今大会が今後の広島県連合小学校長会と広島市小学校長会のさらなる連携につながることを切に願っております。

最後になりましたが、本大会の開催にあたりご理解とご助言をいただきました空本秀寿会長はじめ県連小役員の皆様、ご参加くださいました校長先生方、御提案いただいた校長先生方、そして、現地で大会を支えてくださいました校長先生方・関係者の皆様に改めて感謝を申し上げます。

（広島市立竹屋小学校）

第五十九回広島県連合小学校長会教育研究大会広島市大会

一　研究主題

自ら未来を拓き　ともに生きる
豊かな社会を創る　日本人の育成を目指す小学校教育の推進
～夢や志をもち他者と協働して主体的に新たな価値を創り出す子どもを育成する学校経営～

二　期日

令和五年八月二十一日（月）

三　会場

JMSアステールプラザ
広島市文化交流会館

四　日程等

1　分科会
2　開会行事
3　講演
［講師］魚谷　滋己　氏（県立広島大学　特任教授）
［演題］「学校教育に携わる皆様にお伝えしたいこと」
4　閉会行事

学校経営

「すべての児童が笑顔で学校に来るために」
～三つの合い言葉の実践を通して～

安芸高田市立八千代小学校長　嶋田進吾

一　はじめに

本校は六年前に安芸高田市の八千代町内にあった刈田小学校と根野小学校の二つの小学校が統合してできた全校児童一七〇名の学校である。昨年度は広島県造形教育研究大会の会場校として、造形活動に取り組むことを通して、のびのびと自己表現する児童の育成を目指し取組を進めてきた。今年度からは研究教科を理科として課題発見解決学習の研究を進めているところである。

二　三つの合い言葉

本校に赴任した五年前から年度当初の職員会議で「三つの合い言葉」を学校経営の柱として示してきた。

○EGAO（いつも笑顔で）
○ENJOY（仕事を楽しみ）
○EXPERT（達人を目指す）

題して「三つのE」である。学校経営の最上位目標は「すべての児童が笑顔で学校に来ること」と考え、この「三つのE」を教職員が自らの姿と重ねることができるように話してきた。

まず、すべての児童が安心して笑顔で学校に来るには教職員の笑顔が欠かせない。様々な思いをランドセルに詰めて学校に来る児童に心からの「笑顔」で対応してほしいこと。次に、教職員が仕事を楽しいと感じなければ、心の底からの笑顔は生まれない。仕事を楽しくするもしないも自分次第であるが、そこは組織としてもぜひ支え合ってほしいこと。最後に、教職員がそれぞれの業務で達人を目指さない職場に成長はない。授業に限って言えば、初任者もベテランも授業のプロとして研鑽を積んでほしいこと。これらの内容について日頃の何気ない会話や授業観察後の指導・助言、そして業績評価の面談時など折に触れ話をしてきた。

三　もう一つの三つの合い言葉

前述の「三つのE」に加え二年前よりもう一つ「三つの合い言葉」を加えて示している。

○聴く
○きちんと褒める
○きっちり自己決定させる。

題して「三つのK」である。Kで統一するには多少苦しさはあるが、「児童に寄り添うときの三つの視点」として、これも学校経営の柱と捉え教職員に事あるごとに話している。

まず、児童に寄り添う基本姿勢はその子の話を最後まで「聴く」ことである。たとえ、話の内容が理にかなっていなかったり、話し方がたどたどしかったりしてもまずは「聴く」こと。次に、褒める。ただ単に褒めるのではなく、その子の頑張りやキラッと光るところを具体的に褒める。発達段階によって、できて当然のことをことさらに褒められると素直に嬉しいと感じられない児童もいる。その子その子に応じて褒めなければ自己肯定感の向上にはつながらない。最後に、自己決定。自分で決めさせることでその結果に責任をもつようになることを願い、自己決定の機会をより多く設定すること。この基本姿勢で児童に寄り添うことで笑顔が増えると信じている。

四　おわりに

本校は統合前の根野小学校時代から伝統的に理科を研究してきた歴史がある。体育館前には写真のようなビオトープがあり、児童の憩いの場になっている。ここに集まる児童はカエルをはじめイモリや昆虫など、様々な生き物に興味津々で誰に言われることなく、課題発見解決学習を進めている。先日二年生児童が絶滅危惧種だと言って小さな昆虫を持ってきたので調べてみるとその通りだった。「好きなことに熱中できる。」そんな環境を整え、これからも理科の研究を続けていきたい。

学校経営

「自ら学び、たくましく生きる」関わり合い　つながり合い　一人一人が輝く小学校をめざして

世羅町立せらにし小学校長　重谷美保

一　はじめに

本校は、平成十六年、旧世羅西町内の山福田小学校、小国小学校、津田小学校、黒川小学校の四小学校を統合し、世羅西町立せらにし小学校として開校した。同年十月には町村合併により、世羅町立せらにし小学校と改め、今年度、統合二十周年を迎える。今年度、児童数は百を切り、九十二名、九学級である。年々、児童数の減少が著しい。

二　経営の理念

校訓「こころひろく　ゆめおおきく」のもと、「自ら学び、たくましく生きる」を学校目標に掲げ、学校経営目標を「関わり合い　つながり合い　一人一人が輝く小学校」としている。今年度四月の始業式では、「こころひろく　ゆめおおきく」をめざし、頑張ることの二点について話をした。まず、「自分の考えを自分の言葉で語る」ことである。わからないを含めて、自分の考えを持ち、語ることである。そして、もう一つは、「人を大切にする」ことである。その第一歩として、名前をきちんと呼ぶということ。この二点については、どちらも機会を捉えて話をしているため、意識して生活をしている児童が増えてきている。

三　対話力

今年度は、「対話力」の育成を柱に授業改善に取り組んでいる。本校では、六年間の学びを通して、自分の考えを自分の言葉で語ることができる児童を育成したいと考えている。そのために、日々の授業の中で、話し手を鍛えると共に聞き手を鍛えるという取組も進めている。話し手の考えに対して「それはどういうこと？」「よくわかりません。」「なるほど、納得です。」など、自分の考えと比較し、つっこみを入れることができる聞き手を育てるということである。児童が双方でお互いの考えの理解できる点やできない点を出し合いながら、共に対話をすることで考えの深まる授業をめざしている。今年度は、児童が本音で語り合える対話の在り方や指導者のファシリテート力の向上について世羅西中学校区で世羅西中学校と共に、特に道徳科での授業実践を積んでいるところである。

四　せらにし小　太鼓

平成二十六年、「せらにし小太鼓」の取組がスタートした。当時、世羅町では「せら教育の日」の設定と共に、世羅町内の各学校での学校独自の文化の発表の場として「輝くせらの学校文化発表会」が始まった。本校では、「せらにし小太鼓」をわが校の文化とし、地域の方々の熱い思いに支えられながら取組を続けてきた。年々、六年生が演奏している太鼓を自分たちも早く引き継ぎたいという子供達の思いが高まり、現在の十代目に至る。一年生のころから先輩の叩く太鼓のリズム、力強い音を耳にして育つ子供達の体には、技のみならず「せらにし小太鼓」の魂が宿っていることは間違いのないことである。六年間の学びの集大成である「せらにし小太鼓」は本校の伝統であり誇りである。

五　おわりに

統合二十周年を迎えるにあたり記念事業を盛り上げようと、保護者の皆様が熱心に計画を進められている。「せらにし」という熱い地域性に支えられながら、これからの時代を生き抜く子供達、一人一人が輝くことができるよう、これからも地域・保護者・教職員が一体となり取組を進めていきたい。

朝会講話

「たけっこ」の力を伸ばそう

理事　吉田美和

九月の終わりの社会見学の日に、朝、一年生の教室に行くと、一人一人が、自分のめあてを考えていました。きっと、上の学年の皆さんも、自分のめあてを自分で考えることができていると思います。

さあ、十月になりました。この学年の半分が終わりました。マラソンなどでは「折り返し地点」と言います。今日は、一年の折り返し地点で、皆さんに考えてほしいことをお話しします。

学校のあちこちに、このような「たけっこ」が貼ってありますね。たけっこの「た」は、竹原大好きの「た」。六年生が、竹原の歴史などを色々調べて、学習発表会で発表する準備をしています。他の学年の人も、竹原のぶどうやハチの干潟などを調べていましたね。竹原や地域の良いところをたくさん見つけてください。たけっこの「け」は、計画を立てる力ですね。四月には今年の目標、九月には二学期の目標を書きました。その目標に向かって、自分で計画を立てることができましたか。誰かに言われてやるのではなく、自分で決めて自分で実行できるようになりましょう。そして、立派な計画ができてもそれが実行できなくてはいけません。そこで「こ」の根気強さが必要です。勉強でも運動でも何でも、思いどおりにいかないことがあります。でも、すぐにあきらめず、根気強く努力する人になってほしいと思います。

そして、「つ」は伝える力。十一月に学習発表会があります。これまで学習してきたこと、みんなで協力して練習したことを、しっかり伝えていきましょう。竹西っ子の一人一人が主役です。皆さんの活躍を楽しみにしています。

（竹原市立竹原西小学校）

「自ら伸びる　ともに伸びる」

会員　徳重宏美

学校の生活の中で、「よし、がんばろう」「もっとできるようになりたい」と思った時に、学級や学校が、うまくできなくても大丈夫と思えたり、自分の思ったことを聞いてもらえたりする場所であることが大切だと思います。

私は、小学生のときに、持久走は、いつも最後にゴールしていました。持久走なんかなかったらいいな」と思っていました。でも、六年生の持久走の時は、違っていました。少し走るのが楽しくなっていたのです。それは、先にゴールした一人の友達が、途中から私の隣で一緒に走ってくれていたからです。その時の友達の「がんばれ」「今日は速いよ」と言う言葉の響きは、今も覚えています。私は、今、走ることは嫌いではありません。きっとその時の友達の応援があったからだと思っています。大和小にも、私の友達のように、学級の友達を応援している人がいました。六年生が体育の時間に持久走をしている時に、偶然、見つけました。心が温かくなり、私の小学六年生の時のことを思い出しました。

たとえ、「がんばれ」と声を出さなくても、安心できる学級や学校は創ることができます。例えば、友だちや先生が話をしている時に、静かに聞く。その人の方を向いて聞く。うなずきながら聞く。話している人は嬉しいですね。今も、私の話を私の方を向いて、静かに聞いてくれていますね。私は安心して話をすることができます。ありがとう。

みんなで、校訓である「自ら伸びる　ともに伸びる」大和小学校を創っていきましょう。

（三原市立大和小学校）

「幸せとは」

副会長・理事　竹田行男

突然ですが皆さんは幸せですか。

自分の生活を振り返って「幸せだ」と思える人、「まあまあかな」と思う人、「自分は不幸だ」と思っている人も中にはいるかも知れませんね。幸せと不幸せ、一体何が違うのでしょう。

京都に龍安寺という古いお寺があります。今から五百年近く前に建てられたこのお寺の裏庭に蹲踞（つくばい）という、石でできた洗面器のようなものが置いてあります。これは手を洗う水を入れるものですが、その水を入れるところは四角に彫られています。周りの文字と合わせると新たな文字が見えてきませんか？（写真提示）

この四角は上下左右の漢字と合わせて「われ　ただ　たるを　しる」と読み、漢字ではこう書きます。（文字提示）難しい言葉ですね。意味は「自分は満ち足りているということを知っている」、わかりやすく言うと「私は食べるものに困らず、寝るところもあり、健康で、それだけで十分に幸せです」という言葉なのです。昔の人は幸せと不幸せの違いはお金や豪華な生活や仲良しの友達の数ではなく、「満足する心」や「感謝する心」があるかないかによるのだと考えたのです。

さて皆さんはどうでしょう。この学校に通いながら「あぁ幸せだなあ」と思えることはあるでしょうか。これからは何気ない普通のことに対して「ありがたいな」と思ったり、「ありがとう」という言葉をいつもよりたくさん言ったりしてみましょう。心が楽になり、友達にも優しくなれて、きっと「幸せ」を感じられるはずです。

しっかりお話を聞いてくれましたね。「ありがとう」

（庄原市立口和小学校）

県だより　委り教よ

特別支援教育を身近なものに

広島県教育委員会事務局
特別支援教育課長　津村真一郎

私は県立学校に採用以来、長らく高等学校に勤務し、令和三年度から特別支援学校校長を経験し、今年度から現職である。特別支援学校では、実際の勤務や研修を通して様々な制度や児童生徒への指導方法の数々に触れた。障害がある児童生徒に対し、自分だったらどのように授業を展開するだろうか、どう言葉掛けをするだろうか、どう学校を経営するのが良いのかと、自分ごととして捉えるようになった。今では様々なことを知ることが、特別支援教育の推進のみならず、通常の学級の授業改善、ひいては学校経営の充実につながると考えている。県教育委員会では次のような研修を実施しており、管理職をはじめとして多くの先生方に活用いただいている。

・七月～八月に教員の専門性の向上を目的に、免許法認定講習を開講（特別支援学級等の担任はもとより、通常の学級の担任の皆さんにもこの講座を受講いただきたい。）。

・今年度五月に教育事務所・支所主催の校長研修、教頭研修、教務主任研修で、特別支援教育に係る校内支援体制や発達障害の特性等について説明。

・全校種の特別支援教育コーディネーターを対象としたオンライン研修を年間五回開催。

・自閉症・情緒障害特別支援学級担任を対象としたオンデマンド研修を四～五月に実施。

さらに広島県の特別支援学校では、地域における特別支援教育のセンターとして、「小・中学校等の教員への支援機能」や「特別支援教育等に関する相談・情報提供機能」等の機能を担っている。特別支援学校の担当者が各校へ伺い、児童生徒への指導に悩む先生方へのアドバイスをしたり、職場での研修の講師をしたりしている。（まずは、各地域を担当する特別支援学校にお問い合わせいただきたい。）。

今後とも各教員の専門性の向上を図るとともに、特別支援教育を身近なものとしていきたいと考えている。御協力をお願いしたい。

随想

伝え続けること　信じ続けること

副会長　本藤展康

ある日、現任校に二人の大学生が私を訪ねてきた。その大学生は校長として初めて赴任した学校で最初に卒業させた子供たちだった。この子供たちの学年はいわゆる生徒指導上の課題が大きく、学校全体、全職員で日々子供たちと向き合っていた。はじめはその子供たちは大学のことや、友達のことを話していたが、途中、次のようなことを私に話し始めた。

「校長先生、今でも『感謝・感動・思いやり』言い続けているの？」

その時、正直私は驚いた。その言葉は、かつて私の上司だった方が校長として生徒たちに伝えていた言葉を生徒指導上の課題が大きい学校だからこそ使わせていただいたものだった。また、それぞれの子供たちには重い背景がある。その背景を想うからこそ伝え続けた言葉だった。一年間、ことあるごとに子供たちにこの言葉について話し、どうにか卒業の日を迎えることができた。

そこから数年たち、大学生になった子供たちが私を訪ねて来てくれ、「感謝・感動・思いやり」について話してくれたのだ。当時はすべてのものにいらだっていたことなど。でも、その言葉はなぜかずっと心の中に残っており、大きくなるにつれて「感謝・感動・思いやり」の意味が少しずつ分かってきたと。そして、最後に「ちゃんと小学校最後の六年生を楽しく過ごさせてくれて、見捨てずに卒業させてくれてありがとう。今だから言えることだけどね。」という言葉をくれた。（泣いた…）

私は、教育の成果はすぐには出ず、時間がかかることもあるのだということを改めて二人から学んだ。

私たち教育の最前線にいる者は、子供たちに伝えるべきことは真摯に伝え続け、子供たちの本来持っている強い気持ちと力を信じ続けることが、今こそ（今までも変わらず）大切なことなのだと思う。

子供たちの成長にこそ、教育の答えがあるのだから…。

（尾道市立西藤小学校）

あとがき

令和五年五月八日付けで、新型コロナウイルス感染症が五類感染症に移行したことから、今年度の総会・研究大会、並びに教育研究大会が四年ぶりに参集での開催となりました。また、各学校におかれても学校行事等の実施に向けて、これまでのやり方を見直されたり改善されたりしながら実施されてきたことと思います。このような中、会報一九三号が発行できましたことは、ひとえに皆様方のおかげと感謝しております。県連小広報活動が、少しでも皆様の学校経営の一助となれば幸いです。発行に関わってご尽力いただきま